

小 論 文 (90分)

2021年3月12日

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は5ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は2枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が2枚あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄(2か所)に必ず記入しなさい。
- 6 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 7 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

問題

次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

スマホでつながる人は何人？

スマホへの漠然とした不安の正体は何なのか。この問いについて考える前に、まず、皆さんに質問をしたいと思います。

- ① 日常におしゃべりする友だちは何人くらいいますか？
- ② 年賀状やSNS、メールで年始の挨拶を発信しようと思うとき、リストに頼らず、頭に浮かぶ人は何人くらいいますか？

いかがでしょう。ぼくが今まで学生などに聞いた限り、①は10人くらい、②は100人くらいまで、というのが標準的な答えです。これは、おそらく全国どこでも同じだと思います。

ぼくが、なぜこのような質問をしたかという、今、「自分がつながっていると思っている人」の数と、「実際に信頼関係でつながることができている人」や「信頼をもってつながることができている人」の数の間にギャップが生まれているのではないかと、そして、このギャップの大きさが、現代に生きる人たち、特に生まれたときからデジタルに囲まれた世界に生きる若者たちの不安につながっているのではないかと、そう思うからです。

ラグビーチームの人数が15人である理由

人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました。これは、人間の祖先が熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出したことが関係しています。長い歴史のある時点において、おそらく地球規模の寒冷・乾燥化が起こり、それによって熱帯雨林が分断され、そこで暮らしていた動物たちはサバンナに出て行くか、森が残る山に登るか、低地に散在する熱帯雨林に残るかを選択を迫られたのでしょう。結果的に人間は熱帯雨林を出ました。

そこで、いくつかの特徴を発達させたのです。その一つが集団の大きさです。危険な場所では、集団の規模は大きいほうが有利です。数が多ければ、一人が狙われる確率は低くなるし、防衛力も増します。危険を察知する目がたくさんあれば、敵の発見効率も高まります。実際、森林ゾウとサバンナゾウでは、サバンナゾウのほうが、身体も大きく、集団規模も大きい。人間も、危機から自分の命、そして仲間の命を守るために、集団の規模を大きくしなければなりません。

ただし、集団を大きくすると、食物や安全な休息場所をめぐるトラブルが増えます。仲間の性質や、自分との関係をきちんと頭に入れておかないとうまく対処できなくなります。そのためには脳を大きくする必要がありました。皆さんの中には、人間の脳は、言葉を使い始めたことで

大きくなったと思っている人がいるかもしれませんが、人間が言葉を話し始めたのは7万年ほど前にすぎません。一方で、脳が大きくなり始めたのは、それよりずっと以前の約200万年前に^{さかのぼ}ります。言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです。

人間の脳の大きさには、実は集団規模が関係しています。チンパンジーとの共通祖先から分かれた約700万年前から長らくの間、人間の脳は小さいままでした。この頃の集団サイズは10~20人くらいと推定されています。これは、ゴリラの平均的な集団サイズと同じ。言葉ではなく、身体と同調だけで、まるで一つの生き物のように動ける集団の大きさといえます。サッカー11人、ラグビーが15人など、スポーツのチームを考えるとわかりやすいでしょう。これは、皆さんが、互いに信頼し合っておしゃべりをする友だちの数①に当たります。200万年前、脳が大きくなり始めた頃の集団サイズの推定値は30~50人程度。ちょうど先生一人でまとめられる一クラスの人数ですね。日常的に顔を合わせて暮らす仲間の数、誰かが何かを提案したら分裂せずにまとまって動ける集団の数です。

その後、人間の脳は急速に発達します。今から約60万~40万年前には、ゴリラの3倍程度の1400ccに達し、現代人の脳の大きさになりました。そして、この大きさの脳に見合った集団のサイズが、100~150人。これが②に当たる数です。

真につながれる人の数の限界は150人？

これは、ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者が、人間以外の霊長類の脳の大きさと、その種の平均的な集団サイズの相関関係から導き出した仮説に基づく数字です。ダンバーは、平均的な集団サイズが大きければ大きいほど、脳に占める大脳新皮質、つまり知覚、思考、記憶をつかさどる部分の割合が大きいことを明らかにしました。

そして、現代人の脳の見合った集団の人数を示す、この「150」という数字は、実に面白い数字であることがわかりました。文化人類学者の間で「マジックナンバー」といわれているのはそのためです。

食料生産、つまり農耕牧畜を始める前まで、人間は、この150人くらいの規模の集団で狩猟採集生活を送っていました。天の恵みである自然の食物を探しながら移動生活をする人々には、土地に執着したり、多くの物を個人で所有したりといったことはありません。限られた食料をみんなに分け合い、平等な関係を保って協力し合いながら移動生活を送るためには、150人が限度なのでしょう。そして、現代でも、このような食料生産をしない狩猟採集民の暮らしをしている村の平均サイズが、実に150人程度なのです。

言い換えれば、150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということ。皆さんの生活でいえば、一緒に何かを経験し、喜怒哀楽を共にした記憶でつながっている人ということになるでしょうか。ぼくにとっては、年賀状を出そうと思ったとき、リストを見ずに思いつく人の数がちょうどこのくらいです。互いに顔がわかって、自分がトラブルを抱え

たときに、疑いもなく力になってくれると自分が思っている人の数ともいえます。

つながる人は増えたのに脳の大きさは変わらない

今、ぼくたちを取り巻く環境はものすごいスピードで変化しています。人類はこれまで、農耕牧畜を始めた約 1 万 2000 年前の農業革命、18 世紀の産業革命、そして現代の情報革命と、大きな文明の転換点を経験してきました。そして、その間隔はどんどん短くなっています。農業革命から産業革命までは 1 万年以上の年月があったのに、次の情報革命まではわずか数百年。この四半世紀の変化の激しさを考えれば、次の革命まではほんの数十年かもしれません。その中心にあるのが ICT (Information and Communication Technology = 情報通信技術) です。インターネットでつながるようになった人間の数は、狩猟採集民だった時代からは想像もできないくらい膨大になりました。

一方で、人間の脳は大きくなっていません。つまり、インターネットを通じてつながれる人数は劇的に増えたのに、人間が安定的な信頼関係を保てる集団のサイズ、信頼できる仲間の数は 150 人規模のままということです。テクノロジーが発達して、見知らぬ大勢の人たちとつながれるようになった人間は、そのことに気づかず、AI^(注)を駆使すればどんどん集団規模は拡大できるという幻想に取り憑かれています。こうした誤解や幻想が、意識のギャップや不安を生んでいるのではないかと。ぼくはそう考えています。そして、子どもたちの漠とした不安も、このギャップからきているのではないのでしょうか。

出典：山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち：野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』（ポプラ社、2020 年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えてある。

(注) 人工知能。Artificial Intelligence の略。

問 ICT や AI の発展によって、私たちの「つながり」はどのような変化をする、あるいはしない、とあなたは考えますか。筆者の主張を踏まえた上で 1,000 字以内で答えなさい。